

「学生発」地域振興策を



真協遺跡縄文館を見学する学生たち

学習院大と法政大のゼミに所属する学生ら約60人が2日から、能登町で2泊3日の合宿を行っている。学生の視点で同町の地域振興策を探るのが狙いで、3日には雪が降り積もる中、真協遺跡縄文館など各種施設や公園を巡り、町への理解を深めた。

参加したのは、学習院大の上田隆穂・経済学部長、法政大経営学部木村純子准

教授の両ゼミ学生ら。交流人口拡大を図る同町地域活性化推進協議会（谷内治朋会長）が誘致した。

この日は、県漁協小木支所の杉本一俊参事、能登高校の館一成校長が、それぞれ漁業の現状や学校の取り組みを紹介。館校長は「地方には宝がたくさん眠っている。素材は1級品だが、いかにマネジメントするか」が課題などと語りかけた。その後、2グループに分かれて町内の施設や公園などを見学。真協遺跡縄文館では、高田秀樹館長が「文化財を活用して人を呼び込む仕掛けを考えてほしい」と激励した。4日はイカの干物づくりなどを体験する。

法政大2年の村山隆宣さん(21)は「四季の豊かさなど、実際に見て感じたものを生かして考えたい」と話していた。6月には、学生たちが調査研究の成果を同町で発表する。